

その後は外の舟に乗務して内地と朝鮮間の物資輸送に従事しました。臨時第三機関砲隊が編成されまして、中隊長として博多湾の防衛の任につき、その後、同隊任務終了で解隊し、全員原隊復帰となり、私は宇品基地勤務となり広島に下宿していました。あの原子爆弾地点の三キロほどのところでした。私はその一週間後に何度も爆心地付近まで行きましたが原爆症にならなかった。

八月十五日正午、天皇陛下の玉音放送で終戦となり、残務整理後、故郷会津磐梯山麓のわが家の門をくぐった。

私はSS甲板長として乗務中、部下百名中三十五名の死傷者を出し、またSBでは百六十名中六十名の死傷者を出しました。合せて九十余名の逝去者を出しましたことをお詫びし、二度と戦争のないようにお願い致しますと共に、多くの御英霊に対し心よりご冥福をお祈り申し上げます。

南洋マリアナ孤島 パガン島の戦

茨城県 畑岡 清

「パガン島という島はどんな島ですか。また、畑岡さんは何処の部隊に何時頃入隊しましたか。」

パガン島というのは、南洋のマリアナ諸島の北端近くで、サイパン島の北方約二百九十キロで、長さ十二キロ、幅約四キロの火山島です。

私は大正十一年十一月生れで、現役兵として昭和十八年二月一日に仙台の東部第二十二部隊に現役で入営です。仙台には一ヵ月いて、三月に満州間島省琿春県の春化の歩兵第八十九連隊第十一中隊に入隊したのです。

ですから初年兵の時は国境警備でした。一個小隊ごととに山地で警備というか敵状監視です。山の下が河で、対岸はソ連領です。教育は歩兵第八十七連隊（原）ですが、満州第八五三部隊の名称になったのです。一期

の検閲まで六ヵ月間、相当酷しく、ピントも随分とられた。

―連隊はこの編成で、満州でどのような勤務をしていたのですか。

第八十七連隊は茨城・群馬・栃木の人が多かった。私の記憶に残るのは、擲弾筒の訓練も実弾射撃をしなからできました。訓練中は夏だったが、その後の演習はさすがに寒かった。

前に申したとおり、一個小隊づつ山勤務で、トーチカの中の敵情監察がほとんどで、ソ連の兵舎が見える。こちらは高地だから向う側からは判らない。国境のソ連側には地雷がいっぱい敷設されていた。狼がいて、夜それを引っかけるのか、その地雷を爆発させる。ソ連側は日本軍が侵入したと思って発砲する。これに応じてこちらにも射つが国境はお互いに越えなかった。

春化は琿春から三十里の山の中で自然林、国境は皆山だった。事故はなかったが、部隊で班長以下六人ぐらい逃亡したことがあったが、ソ連のスパイになってこちらに来て捕まったことがあったと聞いたことがあ

る。

―南洋へ部隊が転進したのは何時ごろでしたか、部隊はそのまま行つたのですか。

昭和十九年二月に春化を出発、三月三日、釜山出帆、東京湾で東松二号船団を組み、木更津出港。三月十八日マリアナ諸島のバガン島というところに上陸しました。その間、輸送船十二隻、巡洋艦一隻、駆逐艦五隻、掃海艦一隻でしたが、昼間は飛行機が護衛していました。夜間になると潜水艦に攻撃され、輸送船二隻、巡洋艦一隻が沈没した。各輸送船はそれぞれ単独行動だったので、海没者は救われなかったのです。船がやられたのは一時、二時頃で、夜中だからどこに兵隊が浮いているかわからない。

輸送は約二週間、毎日警戒するが、夜で敵潜水艦の潜望鏡が判らぬので発見が不能、そのため船はほとんど轟沈してしまった。

―バガン島はマリアナ諸島ですが、あまり知られていないのです。また部隊の内容も良く判りませんので、説明を含めて、その後の戦況を話して下さい

い。

バガン島に上陸した時は爆撃はなかったのですが、バガン島の兵備について防衛庁資料によって一寸説明します。

一、島の人口は昭和十七年、内地人四一三名、島民二二九名で、主産物は椰子のコブラ、鯉、鮪で、水は天水を貯えて飲料としていた。

東側に上陸機用の航空基地があり、東西六百メートル南北七百三十メートルの滑走路があった。

二、昭和十九年二月、海軍警備隊三百人が配備、飛行場は不時着陸として使用されただけ。

三、最初に到着した陸軍部隊は歩兵第五十連隊第十中隊で、三月上旬派遣された。その後、中部太平洋方面防備強化のため満鮮地区から第一―第八派遣隊等が抽出派遣され、バガン島防衛のため第五派遣隊が配備されることになった。

第五派遣隊は昭和十九年二月二十四日臨時編成下令、二十五日満州国間島省琿春の第七十一師団（命兵团）で編成を完結した。

第五派遣隊編成概要

第五派遣隊（第七十一師団司令部）天羽馬八大佐、歩兵第八十七連隊第三大隊、歩兵第八十八連隊第三大隊、山砲兵第七十一連隊第一大隊、工兵第四十二中隊通信隊

（歩兵第四十連隊第三大隊はサイパンで玉碎）

バガン島へ上陸した時は敵の爆撃はなくて、その後もしばらくは状況は良かったのです。四月になって島の築城作業が始まりました。島の南の半島は崖になっていて敵は上陸は出来ないというので、島の北半分に重点がおかれたようです。

米軍がサイパンを攻撃始めたので、バガン島の第一回の空襲は六月十日頃だったと記憶しています。それからは毎日、グラマンの攻撃でした。地上にあった兵舎や飛行機格納庫などの施設はほとんどやられ、滑走路も破壊され、人も凄くやられた。私たちの第一大隊第三中隊は南部の高地の海岸線側にあつたためか、被害は比較的になかった。

敵の空襲は、朝六時頃から始まる。グラマン、ロッ

キードP38(双胴)で随分悩まされました。海上スレスレに飛んで来るので電波探知も出来ないで、飛んできてから空襲警報がなる始末でした。

米軍が上陸してくるというので、飛行場作業は中止となつて、陣地を要塞にする洞窟掘りの作業が主になりました。しかし、サイパン玉砕後は、糧秣も資材も弾薬も補給がなくなり食糧の増産をしたり、トカゲ、カタツムリ、魚、パイヤ、マンゴーを採取して食糧にしたり、椰子の実の油を取ったりしました。畑を耕すといつても岩石と珊瑚礁なので、土を他から持ってきて藪を植えたが、勿論そんなものだけでは餓をしるげない。

毎日の空襲と艦砲射撃で、高射砲も機関砲もほとんどやられ、敵のなすがまま、抵抗もできない状態となつてしまいました。サイパンを陥落させて、硫黄島攻撃の米国の艦船は、その中途にあるバガン島を攻撃する。丸三日間叩かれどうして、島の小さい山は姿が変わってしまった。

私たち第三中隊は海岸にタコ壺を掘っていた。掘っ

ても、島は火山なので腰ぐらいまでしか掘れない。上に椰子の葉をかぶせて擬装していた。艦砲は後の山ばかり狙つて射つので、弾は頭の上を越し、海岸の我々は余りやられなかった。結局、敵上陸の時の第一線水際陣地の方が良かったわけで、山の方にいた人は相当やられた。

跳石戦法の敵は、マリアナから硫黄島―本土と進攻していったので、上陸はどうとうしなかったが、二十年八月十五日午前中まで艦砲と爆撃でやられっぱなしでした。

終戦までの間、米軍は一日平均約二十機で連日爆撃を行い、守備隊は十九年九月ごろまで対空戦闘をし、米機五十余機撃墜した。十月以降は敵上陸に備え、また補給も全然ないと後に上官から聞きました。

―終戦は何時、どのようにして知ったのでしょうか。

また、復員は何時頃でしたか。

八月十五日、午後からは飛行機が来ても爆撃も銃撃もしないで、ピラを撒いていった。ピラには「日本政府ポツダム宣言受諾、無条件降服」というものが書い

てあつたと記憶しています。しかし、我々はデマだ。

日本は負けることはない。とそれを信じませんでした。

本当に終戦が判つたのは九月三十日でした。アメリカの駆逐艦が日の丸と星条旗を立てて来た。着岸して、日本の将校、下士官、兵六名ぐらいが上陸し、はじめて終戦を知つたのです。

部隊は昭和二十年九月二日、降伏文書に調印して武装解除されました。戦争の間、給養低下、医療品欠乏のため、アミーバー赤痢、腸チフス、結核、デング熱、熱帯性潰瘍などで戦病死した者が、戦死傷死者より七十%も多かつたと聞きます。

私たち部隊は天羽兵団長以下残務整理者を残し、中島少佐以下一八四五名が、十月二十日輸送船「長運丸」に乗りバガン出発、同月二十六日浦賀港に帰還し、十月三十日それぞれ復員をしたわけです。

兵団長等は昭和二十一年三月六日、残留邦人百四十名と共に駆逐艦「初梅」で佐世保に帰還した。と細かい数字まで防衛庁戦史資料にありました。

ポナペ島戦記

北海道 菅野 四郎

私は昭和十七年一月十日、広島西部第六三部隊に入隊して、三ヶ月の教育後、鮮満国境の安東にある独立歩兵大隊に転属しました。そこで更に三ヶ月の一般教育、奉天の通信学校で無線教育を受け、十一月中頃卒業したのです。それから熱河省の承德へ行き、山の中へ入り、万里長城の南満側で、八路军（共産軍）と戦闘を繰り返していました。

昭和十八年九月末ぐらいまでの戦闘で何名かの戦死者を出しました。私も、その間風雨に叩かれ肺炎を起こし、意識がなくなり入院したのですが、三日目ぐらいで気が付いたらしく、一ヶ月ほどで退院、一人で原隊の安東に帰りました。

—その後は満州での勤務は何時頃まででしたのか。